

読書通信

第10号
発行人: amagata

「蠅は見た!」

七人乗り馬車墜落

馬車大破、全員絶望か!

某月某日、宿場発街行ききの2番馬車Ⅱ乗員一人、乗客六人、計七人Ⅱが崖の頂上から墜落した。馬車は河原に落ち、大破し、乗員、乗客は全員絶望と見られる。原因は馭者の居眠り運転。蒸し立ての饅頭を食べることを習慣としている猫背の馭者は、饅頭が蒸し上がるまで客を待たせ、腹一杯饅頭を食べたため、居眠りをしてしまったらしい。

息子の危篤に間に合うように急ぐ農婦、駆け落ちの若者と娘、母親と男の子、田舎紳士が犠牲になった。が、馬車で羽根を休めていた蠅だけが青空に悠々と飛び立ち、助かった。

この作品は横光利一の「蠅」である。横光利一は新感覚派の旗手として大正から昭和にかけて活躍した。新感覚派は、現実の断片を感覚的にとらえ、それを知的に再

構成することによって、生命感を表現しようとした。雑誌「文藝時代」を母胎とする。他の代表的な作家は川端康成である。横光利一の代表的な作品は、「日輪」「機械」「春は馬車に乗って」「上海」「旅愁」などである。特に「機械」は私の好きな作品である。「機械」のあらすじは、

あるネームプレート製作所で働く「私」の心理を通して、そこで起った作業員同士の疑心暗鬼と諍いから重大な結末に至るまでの経過を独白する物語。段落や句読点のきわめて少ない独特のメカニク的な文体で、機械のように連動する複雑な人間心理の絡み合いが精緻に描かれ、一つの抽象的な「詩的宇宙」が形成されている。一人称の「私」以外

の「四人称」の「私」の視点をを用いて、新しく人物を動かし進める可能の世界を実現しようとした実験小説である。



〈「読書の記録」より〉

【横光利一「蠅」】

▽視点がころころ変わるのがおもしろかった。(A・K)

▽最初に蜘蛛の巣にひっかかっていた蠅が、抜け出した後に馬車に移動して、馭者たちの話を聞いていたところから、蠅が見ていた物語だということがわかった。(Y・M)

▽農婦のしゃべり方が「のう」とか「じゃ」なので、おぼろさんぽくて少しおもしろかった。(J・I)

▽馬車に乗る人々には色々は人がいて、色々な目的で街までいくことは分かりました。(N・I)

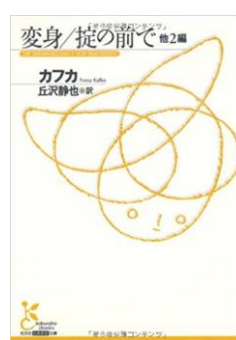
▽馭者のせいで馬車に乗った人が皆死んでしまったのが、ひどいと思った。(Y・K)

▽農婦の息子が危篤で速く街に行きたいのになかなか馬車が来ないというハラハラ感が読んでいて楽しかった。(M・K)

**
**
**

□ クラス文庫より □

「変身」 フランツ・カフカ



カフカといえば「変身」。朝目覚めると虫になっていった主人公と彼を邪魔者扱いする家族。彼は死に、解放された家族は喜ぶ。

《冒頭と結び》

ある朝、不安な夢から目を覚ますと、グレーゴル・ザムザは、自分がベッドのなかで馬鹿でかい虫に変わっているのに気がついた。

(中略)

電車が目的の駅に着いて、娘が最初に席を立ち、若いからだを伸ばしたとき、ふたりにそれは、自分たちの新しい夢とよい意図を保証してくれるもののよう思えた。

後記

先日東京上野でムンクの「叫び」を見てきました。以前から好きな絵画で、自分の中では五本の指に入るほどの作品です。ずっと画中の人物がやるせない思いに対して叫んでいるのだらうと思っていました。が、実はまわりの自然が叫んでいる悲鳴に対して、耳を閉ざしているシーンだそうです。画中の渦のような曲線が、決して直線になり得ない心の中の不安を描き出しているようで、私の心と共鳴します。理不尽な社会を憂う人、痛めつけられ嘆く自然。感受性豊かなムンクはこれらの「叫び」が聞こえてしまい、苦しむ。私たちも、日々不安の中で生きているからこそ、この絵に共感し、救いを求めたしまうのでしょうか。ムンクは同じ構図で何枚も描く画家なので、「叫び」はこの作品以外にも何枚か別バージョンがあります。

